

東アジアを調査する

—台湾の牡丹社事件と民間信仰を中心に—

柳静我*・柳原邦光*・呉玲青**

Research for East Asia:
A Case Study of Mudan Incident and Popular Belief in Taiwan

YU Jeungah*, YANAGIHARA Kunimitsu* and Ling-Ching Wu**

キーワード：海外地域調査, 地域文化, 牡丹社事件, 民間信仰

Key Words: Overseas Regional Research, Regional Culture, Mudan Incident, Popular Belief,

はじめに

鳥取大学地域学部では、4つある学科のすべてで2年生の必修科目として「地域調査実習」を設けている。地域文化学科では、いくつかのグループを立ち上げて独自のテーマを設定し調査している。調査の成果については、学科内中間発表会（10月）を経て、市民に公開する成果発表会（1月）と報告書作成（6月頃）によって公表している。2014年度からは新たに「東アジアグループ」が加わった¹。東アジアグループの狙いは、詳しくは後述するが、東アジアをフィールドに人と文化の移動のもつ意味を考えることにある。

本稿は、東アジアグループが2015年度に夏休み期間を利用して台湾で行った調査の報告と成果に関する考察である。最初に、現地調査に入る前の文献に基づく学習から調査テーマの決定と調査計画の策定、現地調査、その後の研究、発表、報告書の作成までのプロセスと学生たちの研究成果を紹介する。次に海外調査のねらいと、そのために教員が行った様々な工夫、最後に、海外での地域調査が学生たちにとってもつ意味を考える。

第1章 2015年度台湾調査の概要

第1節 なぜ東アジアなのか、台湾なのか

最初になぜ「東アジア」という大きな地域(mega-region)を対象に選んだのか、詳しく説明しておきたい。

地域文化学科創設以来、ほとんどが鳥取県内の調査であったが、本来、地域文化学科の調査対象は

*鳥取大学地域学部地域文化学科

**台湾高雄師範大学歴史文化及語言研究所

¹ 2014年度台湾地域調査については、柳静我・柳原邦光・浅田萌・池本愛里奈・岡田紗希子・栗田瑞穂・徐元俊「東アジアを調査する—台湾語教育と媽祖信仰を通して—」(『地域学論集』第12巻第1号, 2015年)を参照。

鳥取県内や国内の小さな地域にとどまるものではない。誰であれ生活が営まれるのはローカルな空間であるから、小さなスケールで地域を捉えることが重要なのはいうまでもない。しかし、その営みをもっと大きな関係性のなかで捉える必要もある。この場合、いきなりグローバルというのも対象が大きすぎて焦点化しにくい。なによりじっくりこない。国家の枠組みをとりあえず脇において、ローカルな空間から大きな地域までの射程で、わたしたちの生活を包んでいる「様々なつながりや関係性を捉えるまなざし」を獲得することに意味があるのではないだろうか。

そもそも「わたし」の生活の場である「いま、ここ」から少しずつ視野を広げて、つながりや関係性を捉えることは、鳥取大学地域学部の構想する地域学の重要な視点の1つである²。地域調査実習も、単なる授業ではなく、地域学の視点を踏まえつつ、地域学の内実をさらに豊かにしていく機会にしたい。

次に、東アジアを選択した理由である。まずいえることは、東アジアが、歴史的に見て、わたしたちの生活に最も深い関わりのある地域だからである。さらにもう1つ、陸続きの世界でないことも重要である。東シナ海という海を介して人やモノが自由に移動するなかで様々なつながりや関係が生まれ、重なり合い、変化していく。そのような動きを歴史的に捉え、今に活かすまなざしが必要なのではないか。

具体的に調査する地域として選んだのは、台湾である。実をいえば、決定的な理由があったわけではない。中国・韓国・台湾のなかでどこを選ぶか学生たちに聞いたところ、多くが台湾を希望したのである。台湾の歴史を一瞥してすぐにわかるのは、主として17世紀以降、外から様々な集団が入ってきて、台湾を支配し、文化的に大きな影響を残してきたことだ。中国大陸の漢民族を始めに、ヨーロッパからオランダ人やスペイン人、そして日本人がやってきた。戦後は、蒋介石率いる国民党である。台湾は様々な文化が衝突し交わって多層的に積み重なっている興味深い地域なのである。

第2節 台湾調査前の準備

以上の点を考慮して、最初に読むべき文献として選んだのは、羽田正編・小島毅監修『東アジア海に漕ぎだす1 海から見た歴史』(東京大学出版会, 2013年)である。同書は、様々な地域をつなぐ「海」に着目して、明確な境界のない東アジアという海域で生成した様々な文化の複合性や重層性、変化から多様な意味を見出そうとしている。国家の枠組みや陸地から見ただけでは分からない、海を移動する人々独特の行動の仕方、国境にとらわれないものの見方や文化が存在していた。彼らにとって世界はどのように見えていたのか。これは実に興味深い問題である。そこで2014年度に続いて2015年度も、東アジアに関する基礎知識と「海から見る」視点とを学ぶために、まず同書を読むことから始めた。

続いて、東アジア全体の歴史的な脈と台湾の歴史のあらましを知るために、岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」(岸本美緒編『世界歴史〈13〉』, 岩波書店, 1998年)と周婉窈『図説 台湾の歴史』(平凡社, 2013年)を読んだ。どの文献も学生たちが1章ずつ担当してレジュメを作成し

² 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門—(つながり)をとりもどす』(ミネルヴァ書房, 2011年)に収められた、家中茂の第4章「生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流」と仲野誠の第5章「生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して」を参照。なお、内山節は、大きな世界から小さな世界への視点の移行が進んでいるとして、次のように述べている。「まず最初に大きな世界を構想し、その大きな世界との関係で小さな世界を考える発想から、自分たちが暮らし、責任のもてる小さな世界をそれぞれが創りながら、その小さな世界のネットワークとして、大きな世界をもみていこうという発想へと、転換しはじめたのである。(内山節『「里」という思想』, 新潮社, 2008年, 101頁)

報告する形で、意見交換しながら読み進めた。

難しかったのは、具体的な研究テーマの設定である。とりあえず、2014年度の調査実習報告書「台湾の文化を考える一言語と媽祖信仰を通して」を読んで、学生たちが何に興味を覚えるか、確認した。その結果、2015年度も続けて媽祖信仰を調査することになった。これは比較的容易に決まった。このほかにもう1つ「台湾出兵」に決めた。このテーマは教員が提案した。台湾と日本との関係を歴史的に考えたかったからだが、近代におけるファーストコンタクトが、残念なことではあるが、「台湾出兵」だったのである。それで毛利敏彦『台湾出兵—大日本帝国の開幕劇』（中央公論社、1996年）を読んだ。

文献を読むのと並行して、台湾での現地調査計画を立案した。東アジアグループの担当教員である柳静我教員（チベット史研究）が、台湾の呉玲青先生（台湾国立高雄師範大学助理教授、台湾史研究者）と楊朝傑先生（台湾史研究所研究助理、媽祖信仰研究者）と協議しながら計画を立てた。2014年度もそうだったが、台湾のお二人の協力なしには台湾での現地調査は不可能だった。現地調査期間は5泊6日ときわめて短く、テーマと現地について相当な知識がなければ、どこを調査対象とし、誰にインタビューをすればいいのか、わからない。現地の協力者を探すのも難しい。両先生には現地調査でも最初から最後まで同行していただいたが、意味ある調査にするために事前調査までして下さった。こうした配慮が調査を豊かな内容にしたのである。台湾から帰国後、文献でいろいろ調べるうちに、このことをしばしば痛感することになった。お二人にはただただ感謝する次第である。

調査に参加したのは、ほかに地域文化学科の教員2名（柳原邦光：フランス近代史、岸本覚：日本近世近代史）、学生が15名（2年生13名、3年生2名）である。期間は2015年9月7日から12日までで、主に台湾南部で調査を行った。

第3節 台湾調査の概要

調査の概要を紹介すると、1つ目のテーマである媽祖信仰については、信仰に地域性がみられることが2014年度調査で分かっていたので、今回は信仰が特に篤いとされる台湾の南部と原住民の居住する地域を調査した。漢人の民間信仰として始まり、様々な王朝の支援を受け、中国大陸の南部、台湾、東アジア、東南アジアに広がった媽祖信仰は、在地の信仰と関係を持ち、土着化した。諸民族・諸地域によって様相は異なる。それで2015年度は、媽祖信仰の他に民間信仰や原住民居住地域で原住民³の信仰や文化も調べた。詳しくは後述するように、台湾南部を西の海側から東に向かって山地の原住民地域まで調べたことで、様々な信仰や文化の複雑な関係を垣間見るようになった。

1874年の「台湾出兵」（台湾では1871年の出来事と合わせて「牡丹社事件」と呼ぶ）に関しては、日本と台湾原住民との関係ということになるが、「牡丹社事件」の現場を訪ねて事件の細部と原住民の歴史認識について調べることにした。それでバスをチャーターして、牡丹社事件の舞台となった地域を訪ね、牡丹国民学校（原住民の子供が在校生の多くを占める）で牡丹社事件に詳しい華恒明先生と高加馨先生に、原住民からみた「牡丹社事件」の認識と歴史叙述についてお話をうかがった⁴。中

³ 「原住民」という表記について説明しておかねばならない。よく似た表現に「先住民」がある。日本では主に「先住民」の表記が用いられているようであるが、近年では「原住民」を用いる場合もある。台湾では、先住民はすでに滅びた民族を表すとして、法律を含めて原住民を用いている。本稿では、台湾での意味解釈を尊重して、原住民と表記する。

⁴ 高加馨先生には日本語に訳にされた論文がある。高加馨、2008、「Sinvaudjan から見た牡丹社事件（上）」『琉球大学教育学部紀要』（72）：41-63、同、2008、「Sinvaudjan から見た牡丹社事件（下）」『琉球大学教育学部紀要』（73）：27-50。また、屏東縣牡丹郷牡丹國民小學、2011、『排灣族的故事 浴血古石門 牡丹社事件』の出版にも尽力さ

国語と英語のできる柳静我教員が通訳を担当し、台湾語のときには呉先生の助けを得た。続いて、同じく原住民児童の多い青山国民学校を訪ね、在野の研究者として牡丹社事件を長年研究してこられた華阿財さん⁵のお話（日本語）を聴いた。その後、原住民に殺害された宮古島などの漂流民を埋葬した琉球藩民墓（現在は遺体はない）などの史跡を訪ねて、現地の人々が台湾と日本との歴史的な関係のなかで事件をどのように位置づけているのか、調査した。

現地調査終了後は、現地で得た新たな疑問点を含めて、文献で調べたが、帰国間もなく開かれた中間発表会（2015年10月30日、鳥取大学地域学部内）では、写真と映像を中心に調査の印象を伝えるにとどまった。市民に公開する地域調査実習成果発表会（2016年1月23日、県民文化会館）では、「台湾と東アジア—牡丹社事件と民間信仰を通して—」と題して、論点を整理した報告ができた。最後の仕上げが報告書の作成であるが、2016年5月に完了した。

現地調査の日程は下記の通りである。

9月7日	関西空港で集合、出発、台湾高雄空港到着 高雄のイギリス領事館と海難者18名を祀る民間信仰の廟を調査。
9月8日	高雄から屏東車城石門へチャーターしたバスで移動。牡丹社国民小学校で小学生と交流。原住民（パイワン族）の小学校教員である華恒明先生・高加馨先生と「牡丹社事件」などに関して意見交換。統埔（琉球藩民墓）、海生館（日本軍上岸記念碑）、亀山、恒春城を調査。恒春宿泊。
9月9日	満洲郷に移動して満洲响林順天宮（山地原住民の媽祖廟）調査：満洲郷の郷長や霊力をもつ女性（2名）など原住民からお話を聴き、質疑応答、交流。昼食をごちそうになる。新しい民間信仰である田中將軍廟を調査。東港で、朝隆宮、東隆宮、東港神社を訪ね、王爺信仰など古くからある民間信仰を調査。高雄宿泊。
9月10日	屏東三地門青山国民小学校を訪ね、林季福校長と華阿財さんのお話を聴き、質疑応答。山側の媽祖廟である旗山（天后宮）と海側の廟（天后宮）のほか、新しい民間信仰である蔣公報恩觀、蔣公感恩堂を調査。高雄宿泊。
9月11日	新幹線で台北へ移動。李先生（台湾芸術大学副教授）の案内で台北市内の植民地時代の建築物や史跡を調査。台北宿泊。
9月12日	桃園空港出発、関西国際空港着、解散。

第2章 調査の成果—調査報告書から

学生たちは中間発表と本発表を終えて、3年次前期に報告書を作成する。東アジアグループも調査結果を「台湾と東アジア—牡丹社事件と民間信仰を通して—」にまとめた。本章では、この報告書をもとに学生たちがどのような疑問を抱き、どのような結論に達したか、紹介する。

学生たちの大きな問いは、「東アジアにおいて様々な文化はどのような関係をもってきたのか、背景にどのような動きがあるのか」である。この問題を具体的に検討するために、台湾の「牡丹社事件」

れている。

⁵ 華阿財さんは牡丹社事件当時クスクス社の頭目だった先祖をもつ家系に生まれ、原住民を祖父に、漢民族を祖母にもつ方である。名刺には、「華阿財」のほか、アルファベットで本族名と日本名が併記されている。教師、郷長、県議員を務められたほか、パイワン族をはじめとする原住民の文化や言語を保護する要職にあった。

と民間信仰を取り上げた。個々の疑問点は後述するとして、学生たちは調査を経て自分たちが到達した理解、感じ取ったこと、そして文献調査だけでは分からない、現地調査をしてはじめてつかむことのできた手応えを書いている。

それでは、これから「牡丹社事件」と民間信仰の順に報告書を要約する形で紹介する。

第1節 牡丹社事件

(1) 文献からわかったこと

最初に、牡丹社事件の概要である。1871年に「琉球漂流民殺害事件」とされる出来事が起こった。台湾東南岸に漂着した宮古島民等の多くが原住民に殺害されたのである。漂流民の一部だけが現地の漢人に助けられて帰国できた。1874年には、日本政府がこの事件を理由に台湾に出兵した。西郷従道率いる日本軍は原住民と戦って集落を焼き払い、日本政府が清国との和約を締結した後に帰国した（「台湾出兵」）。この近代日本最初の海外派兵によって清国政府に琉球の日本帰属を認めさせた。台湾では、1871年から1874年までの出来事をひとまとめにして「牡丹社事件」と呼んでいる。パイワン族の「牡丹社」という部落が事件の舞台になったからである。

学生たちが疑問に思ったのは、次の点である。この発端は原住民による漂流民殺害である。海難にあった漂流民を救うのが当然なのに、なぜ殺害してしまったのか。事件はなぜ日本軍と原住民との戦いという悲劇につながってしまったのか。こうした展開は何を物語っているのか。

学生たちは文献を利用して事件の詳細を確認した。その中で重要なところを報告書から要約して示すと以下ようになる。

最初に漂流民殺害事件のあらましである。1871年10月18日、那覇港を出発した船が遭難して、11月6日、台湾の東南岸に漂着する。上陸できたのは66名で、西を目指して進んだところ、クスクス社（パイワン族）の15、6軒ほどの小さな集落にたどり着いた。集落の人々は困惑しつつも、漂流民が武器を持っていないことを確認して粥を与えるなどした。翌朝、原住民は鉄砲や蕃刀を持って現れ、「ここで待つように」と言い残して狩り出かけた。しかし、漂流民たちは、首を切られるのかと恐れ、監視の隙を盗んで逃げ出した。そこでクスクス社の人々は牡丹社に応援を要請し、漂流民を追いかけた。漂流民は日本語を話すことのできる漢人商人に匿われる。追ってきた原住民と話し合いが始まるが、結局、54名が殺害され首を切られた。難を逃れた12名は近辺の村に逃げ込んで、客家人に助けられた。客家人たちの手厚い保護を受け、台湾府城、福建省福州府経由で1872年6月7日、那覇港へ到着した。

次に、台湾出兵について。1874年5月、西郷従道率いる日本軍が台湾の龜山に上陸した。まもなく原住民との戦闘が始まり、激戦となる。「石門の役」では、原住民の戦死者は16名を数え、牡丹社の頭目父子も戦死している。さらに日本軍は牡丹社集落を襲い、家屋を全て焼き払ったが、村人は山中に逃げ込んで抵抗を続けた。その後、停戦に向けた話し合いが始まり、牡丹社やクスクス社が投降する。10月末、日本政府は北京で清朝と和約を締結し、日本軍に撤退を命じた。日本軍が台湾を去ったのは12月27日である。この間、日本軍の犠牲は大きく、伝染病や風土病による病死者は600名近くにとぼった。

台湾出兵の名目は、琉球民の保護と原住民への懲罰である。日本国民である琉球民が原住民に殺害された報復として出兵したというのであるが、当時、琉球は清と日本に両属しており、日本の領土とは言い難い状況にあった。政府は1871年の事件を利用し、琉球の日本への帰属を国際社会に承認させようとした。原住民は国際関係の動きに巻き込まれたのである。

清朝は台湾を統治していたが、原住民の居住地を清の統治や教化の及ばない地域として1871年の事件に関心を示さなかった。台湾出兵後は積極的な政策に切り替え、日本軍の侵攻に備えて恒春城を建設した。

(2) 現地調査ではじめてわかったこと

牡丹社事件について学生たちが知りたかったのは、「原住民から見た牡丹社事件とは、どのようなものか」である。この問題について、学生たちは現地調査の結果を以下のようにまとめている。

インタビューによってわかったことは、1871年の出来事が原住民にとって当然の自衛行動だったことだ。人口200人あまりの村にとって、66人もの成人男性の出現は脅威だった。それでも水を分かち合う伝統的儀式を行って、家族・仲間として迎え入れようとした。ところが漂流民が逃げ出したため、「侵入者」とみなして殺害した。侵入者に制裁を下すのが習わしだった。つまり、原住民の行為は部落を守るための、村の規範に基づいた行動だった。

これに対して、1874年の出来事は日本軍の不当な侵略行為に対する、村を挙げての戦いである。多数の死傷者を出し、集落も焼かれたが、敗れたわけではない。先祖が村を守るために強大な日本軍と勇敢に戦ったことは、村人にとって次世代に伝えるべき誇りである。

牡丹国民小学校の高加馨先生によれば、このような事情が台湾史で語られることはない。実際、教科書では牡丹社事件の記述はとても淡白である。漫画『完全版漫画台湾歴史 古早的臺灣』(2013年)をみても、日本を台湾の敵国とみなす視点だけで、原住民に寄り添う姿勢はない。子供たちは教科書などで台湾史一般を学ぶが、台湾史には侵略の被害をこうむった人々や子孫の気持ちは描かれていない。自らの歴史を知らず、したがって先祖の行動を誇りに思うこともない。

そのため牡丹国民小学校では、『浴血古石門』という絵本を使って牡丹社事件を特別に教えている。絵本は、漂流民が上陸する直前の原住民の穏やかで楽しい生活から始まる。そこに大勢の漂流民が現れ、大きな脅威となる。村人と漂流民との間に誤解が生じ、不幸な展開になるが、その経緯が両者の立場と事情を簡潔に紹介しながら描写される。次に、この事件を日本政府がどのように受け止め利用したか、圧倒的な日本軍を前にして、リーダーや村人たちがどのような覚悟をもっていかに勇敢に戦ったのか、さらに終戦へと至る経緯まで丁寧に描かれる。絵本の冒頭と末尾では、牡丹社事件の今日的意義が語られる。「わたしたちは歴史のなかで広い角度で牡丹社事件を見ることを学び、和解と共生を追求し、愛があり、平和をもたらす、普遍的な価値を明らかにしなければならない」で始まり、2005年の沖縄への「和解」の旅で終わっている。

次に「琉球藩民墓」について。この墓は殺害を免れた漂流民を救った漢人たちによってつくられ、子孫によって今も祭祀が続けられている（実際に、墓碑の前に供え物が置かれていた）。墓には大きな墓碑があったが、建立したのは日本軍を指揮した西郷従道で、「大日本琉球藩民五十四名墓」と刻まれている。裏面には、「明治四年十一月、我琉球藩民遇颶破船 漂到臺灣蕃境 誤入牡丹賊窟 為兇徒所殺者五十四人」とある。墓碑は、琉球藩民は日本に属していると主張して、出来事を意味づけている。

(3) 漂流民にとっての牡丹社事件

学生たちは帰国後もう一方の当事者である漂流民とその子孫にとってこの事件がどのようなものだったか、調べた。参考にしたのは、宮古島民である宮國文雄氏の『宮古島歴史物語① 宮古島民台湾遭難事件』(那覇出版社, 1998年)である。著者は生存者の証言史料から漂流民の様子をおおむね以

下のように描いている。

原住民を前にしたとき、漂流民の状況は厳しいものだった。漂流中、衣服や食料を海に投げ捨てたので、飢えと疲れを感じていた。また、7日間も、いつ沈没するのかわからない恐怖と不安のなかにあった。その上、村では武器を持った原住民から衣服や持ち物を奪われた。言葉も通じないなかで原住民の文化や習慣を理解できるはずがなかった。「首を刈られるのではないか」という恐怖と不安に襲われて、「夜が明けたら村を出よう」と意見を固め、逃げ出した。原住民に捕まったとき、逃げ出した理由を尋ねられても言葉が通じなかったため答えられず、誤解を解くことができなかった。幸いなことに、漢人たちが12名を匿い助けてくれた。

いうまでもないことだが、宮古島民にとって重要なのは1871年の殺害事件である。なお、著者は現地を訪ねて、今もなおお子孫によって供養が続けられていることに深く感動している。

(4) 学生たちのまとめと気づき

学生たちは文献調査と現地調査からどのような気づきに至ったのか。「牡丹社事件」班は最後に次のように述べている。

台湾出兵のきっかけとなった1871年の事件は、言語や文化の違いによる悲劇である。それで終わってもよかったはずであるが、1874年、日本軍との痛ましい戦いが起こった。原住民は近代国家が作られていくなかで、東アジアの国際関係に巻き込まれてしまったのである。原住民の生活は日常の生活の場で完結していなかった。

次に、現地を自分の目で見て、様々な人たちから話を聞いたことで、日本とか国家というナショナル・ヒストリーの視点だけでなく、当事者や地域の視点から見ることの重要性に気づいた。出来事の見え方は立場によって異なる。1つの立場や視点からは一面しか見えない。逆にいえば、他の側面が見えなくなる。現地調査によって、1つの出来事を様々な立場から見ることで、出来事のもつ複雑さと、何よりも当事者の切実さを知ることができた。

第2節 台湾の民間信仰

媽祖信仰調査ということで現地に入ったが、学生たちは媽祖信仰以外の廟を目にして、様々な民間信仰があることに気づいた。また、牡丹社国民小学校を訪ねたとき、民間信仰とも違う独特の文化的世界があることがわかった。それで学生たちは「なぜ台湾にはこれほどまでに多様な信仰や文化が併存しているのだろうか」という疑問を抱き、この問いに答えることを調査目的に設定した。

報告書はこの問題を考える上で必要な情報を以下のように紹介している。重要なことは、中国大陸から台湾海峡を越えてやってきた漢人とそれ以前から台湾に住んでいた原住民との関係だ。16世紀から17世紀にかけて、大陸から漢人が徐々に台湾島の西岸に移り住み、18世紀になるとさらに顕著になった。漢人が東に居住地を拡大していくにつれて、原住民は山地へ追いやられていった。この動きの中で両者の間で衝突が生じたが、婚姻を結んで混血が進んだ場合もある。それが「熟蕃」（「平埔族」）で、漢人の文化を受け容れた。拒んだのが「生蕃」である。2つの言葉は清朝時代や日本統治下に使われた表現であるが、地域的区分として使うと、海側に漢人の地域（台湾島の西側）、山地に「生蕃」地域（同東側）、その間に「熟蕃」地域という位置関係になる。民間信仰は漢人がもたらしたもので、漢人居住地の東進にともない山地にも広がっていく。

報告書は続いてかつての漢人地域、「熟蕃」地域、「生蕃」地域の順に信仰や文化の特徴について述べる。以下はその要約である。

(1) 漢人地域の民間信仰

漢人地域で訪ねた民間信仰の廟で祀られていたのは、主に媽祖、王爺、註生娘娘、境主公などの神である。大陸の民間信仰では、天公を頂点に序列化されており、調査した廟で祀られていたのは低位の神々である。これらの神は生活に密着した神で航海、生育、除疫など明確な役割をもっている。廟建築では、中央入口や屋根に天と地をつなぐ、あるいは皇帝を象徴する龍の像があった。内部には、中央に観音や媽祖、王爺など、廟の主神が鎮座しており、向かって右側に「註生娘娘」（安産の神）、左側に「福德正神」など土地の神が配置されていた。

たとえば、王爺信仰は福建で疫病を引き起こすとされた悪神を「五瘟神」と呼んで祀ったことに始まる。疫病の消滅を願って「瘟神」を海に送り出した（「王船流し」）。この「五瘟神」が台湾で「王爺」と呼ばれるようになった。人形を依代として疫病のような悪いものを王船に乗せ、船を燃やして王船を別の世界へ送り出す。こうすることで幸福が守られるとされる。調査した東隆宮では、3年に1度、4000万円もかけて王船をつくり、海で燃やす。王船内部には小さな媽祖像が安置され、他に住民が行列を組んで家々を回って集めた人形と大量の「紙銭」も積み込まれる。王船流しには人々のとてつもないエネルギーが感じられる。

蔣公感恩堂のように新たな民間信仰も生成している。この廟は、蔣介石の死後1976年に浙江省出身の漢人によって蔣介石を祀るために創建された。中央に観音像、向かって左に三官大帝（天と地と水を祀る三界公、「天神」の1つ）、右には蔣介石像を配置している。このほか田中將軍廟もある。1970年代に建てられた廟で、台湾で戸籍や法律を整備したとされる田中綱常が「田中將軍」として祀られている。中央に「田中將軍」が鎮座し、すぐ隣に乃木希典、北川直征、2名の従軍看護婦が祀られている。両脇には安産の神（「註生娘娘」）と土地神（「福德正神」）が祀られている。廟を創建した女性によれば、28歳の時、夢で「田中將軍」のお告げがあって建てたということである。

新しい民間信仰は人々の思いや必要に応じて作られる。対象は信仰を感じられるものでありさえすればいい。目につくのは、1つの廟にいくつもの神が祀られていることだ。ご利益のある神ならたくさんあった方がいい。様々な危険から守ってもらいたい、安心して生きていきたいという願い、生活の豊かさを求める気持ち。このような願いに応じてくれるものを加えるのは、自然なことなのかもしれない。こうした現象の背景には、様々な伝染病など、台湾の風土や原住民との絶えざる過酷な戦いのなかで、生命が常に危険にさらされていたという歴史的な事情がある。

(2) 「熟蕃」地域の信仰

「熟蕃」地域では、満州郷にある満州順天宮を調べた。これは自然災害のために本来の場所を離れて仮にもうけられた廟である。ここでも確かに中央に媽祖像が配置されている。ところがよくみると、媽祖像の前に色鮮やかな赤い布に包まれたガラス瓶が置かれている。瓶は原住民の伝統的な信仰対象である。壺を始まりとし、缶や瓶に草を挿して、女神アリズを拝むという。主に台湾の南部と東部にアリズ信仰をもつ集落があるが、この信仰は台湾だけでなく、南方のはるかに広い地域にみられる現象でもある。

アリズ信仰についてはラッセルの研究がある。それによれば、アリズは水を満たした瓶で象徴され、霧を発生させて作物を育てる。媽祖信仰は、靈験を伝え聞いて試しに祀ってみたところ、深刻な水不足が解決したため、平埔族の間で信仰されるようになった。平埔族は女性である媽祖を「アリズ」と同一視して自文化に取り込んだ。漢人の文化を受け入れたが、それによって自文化を喪失したのではない。むしろ、漢人文化を取り込んで自文化を存続・強化させた。

順天宮関係者の話によれば、満州郷では原住民、福建人、客家人が共存しており、通婚も行われている。問題の瓶は100年余前に海で拾ったもので中に水が入っている。瓶には「北港朝天宮」という台湾で最も古く由緒のある媽祖廟から送られた帯がかかっている。原住民の瓶信仰と媽祖信仰が共存している。パイワン族の老齢の女性二人に聞いたところ、「神の声」（媽祖ではないようである）を聞く能力があって、代々、女性たちがそういう力をもってきた家に生まれたのだという。廟にお参りするときに使う道具の1つは豚の骨で、油を塗って作物に押し付ける（漢人の民間信仰にはみられない）。媽祖は、元々、航海神なのになぜ山中で祀るのかという質問には、「厳密に神を分けるという考えはありません」という回答である。

満州郷でわかったことは、漢人の文化と原住民の文化が混在していることだが、原住民の文化が印象的で、祭りでは原住民の文化がもっとはっきり現われるという。全体的に満州順天宮で行われていることはラッセル説に近いと思われた。

(3) 「生蕃」地域の信仰

「生蕃」地域では、牡丹社（パイワン族）の2つの小学校（牡丹国民小学校と青山国民小学校）で話を聞いて、以下のことが分かった。

牡丹社では漢人文化の廟のような民間信仰はみられず、水を貴重で神聖なものとする原住民の古い文化があった。水を分かち合うことは、仲間になること、家族になることを意味していた。外部の者と出会ったとき、水を分け合う儀式を行って仲間になり、衝突を避けようとしたようだ。

もう一つ、パイワン族には創世神話の主役であるヘビ信仰がある。ヘビはパイワン族の祖先を守り知恵を与えたとされる。青山国民小学校では児童たちがこの神話を演じて、全国的な賞を獲得している。また、小学校までの道や校舎の壁には、かつての狩猟生活やヘビなどの原住民文化が描かれており、子どもたちは登下校の道すがら伝統的な文化を学ぶ。

ヘビ信仰は、しかし、台湾の原住民だけのものではなく、日本から地中海に至る極めて広い地域で確認されている。世界の原始ヘビ信仰の根源的な要因は、外形が男根に似ていること、脱皮によって生命が更新されること、一撃で敵を倒す毒の強さの3点である。パイワン族のヘビ信仰は、このような広域的な文化に属しており、根が深い。

この地域では、水の文化やヘビ信仰などきわめて古い文化が存在して、生活の中に根づいている。これが原住民独自の文化かという点、さらなる調査が必要だ。広域的に存在し、長期的に持続する文化と共通する点があるからで、原住民の文化の深さと広さを示すものかもしれない。ここでは漢人の民間信仰は見られない。

(4) 調査から見てきたこと

印象深いのは、それぞれの信仰や文化の強靱さとその根っこの深さである。満州順天宮では、漢人の民間信仰と原住民の文化のどちらかが消えてしまうのではなく、共存していた。また、かつての「生蕃」地域の集落では、古くからの信仰という文化が生活の中にしっかりと根付いていた。注目すべきはその広がりである。大陸から台湾へ渡ってきた文化のほかに、原住民文化のなかにはるかに広い地域とのつながりを確認できた。空間的の広がりや時間の深さを異にする様々な文化が台湾で出会い、層を成していたのである。また、こうした出会いのなかで、衝突や反発だけでなく、かつての「熟蕃」地域で媽祖がアリズと同一視され取り入れられたように、様々な選択や利用もあったことに気づかされた。

第3節 学生たちの気づき

学生たちは、報告書の最後に、全体のまとめとして、異文化の出合いと台湾における諸文化の関係性や多層性について次のように述べている。

異文化と出合ったとき、何が起きるのか。牡丹社事件では、衝突と悲劇である。言葉や文化の違いは、それが置かれた状況によっては取り返しのつかない悲劇を生むことがある。また民間信仰であれ原住民の文化であれ、人の営みに根差した文化の強靱さとエネルギーがあった。そして台湾の信仰や文化の根っ子はどこまで深く広いのか、という新たな問いを得た。また、漢人と原住民の文化が出合ったときの「選択と利用」と、そこに深い知恵があることを知った。どちらも消滅することなく生きている。ただ1つの文化ではなく、様々な文化が関わり合い積み重なっている。最後に、自分たちの生活にはどのような文化が隠れているのか。どのような文化的地層の上に今があるのか。今、必要なものは何か、何を求めているのか、という諸々の問いをえることができた。

参考文献

(1) 「牡丹社事件」関係の参考文献

- ・伊藤潔, 1993, 『台湾 四百年の歴史と展望』中央公論社
- ・華阿財, 2006, 『「牡丹社事件」についての私見』『台湾原住民研究』第10号
- ・岸本美緒, 1998, 「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」, 岸本美緒(編)『世界歴史〈13〉』岩波書店
- ・高加馨, 2008, 「Sinvaudjan から見た牡丹社事件 (上)」『琉球大学教育学部紀要』(72): 41-63
- ・高加馨, 2008, 「Sinvaudjan から見た牡丹社事件 (下)」『琉球大学教育学部紀要』(73): 27-50
- ・羽田正(編), 2013, 『東アジア海域に漕ぎだす1海から見た歴史』東京大学出版会
- ・屏東縣牡丹郷牡丹國民小學, 2011, 『排灣族的故事 浴血古石門 牡丹社事件』
- ・宮國文雄, 1998, 『宮古島歴史物語①宮古島民台湾遭難事件』那覇出版社
- ・毛利敏彦, 1996, 『台湾出兵—大日本帝国の開幕劇』中央公論社
- ・越田稜, 1990, 『アジアの教科書に書かれた日本の戦争・東アジア編』梨の木舎
- ・杜福安, 2013, 『完全版漫畫台灣歴史 古早的臺灣』玉山社出版事業股份有限公司

(2) 「台湾における民間信仰」関係の参考文献

- ・蔡焜燦, 2015, 『台湾人と日本精神』小学館
- ・Terence C. Russell, 2013, “Mazu and Scincization: indigenous peoples and the cult of the goddess”『媽祖信仰文化在暨地人文藝術國際學術研究会論文集』財団法人北港朝天宮
- ・周婉窈, 2013, 『図説 台湾の歴史』平凡社
- ・劉 枝萬, 1987, 「台湾の民間信仰」『創大アジア研究』第8号
- ・安田喜憲, 1997, 『NHK 人間大学 森と文明 環境考古学の視点』日本放送出版協会
- ・安田喜憲, 2013, 『普及版 稲作漁撈文明—長江文明から弥生文化へ—』雄山閣
- ・吉野裕子, 2008, 『山の神 易・五行と日本の原始蛇信仰』講談社
- ・島田潔, 2009, 「台湾の民間信仰にみる神霊・人・自然の関係—比較宗教文化的視点から」『2009 年度財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書』財団法人交流協会
- ・吳玲青先生講演「台湾文化研究の今後の方向性について」, 2016年3月27日, 於鳥取大学

第3章 2015年度台湾調査の成果

第1節 海外調査の意義

東アジアグループの特徴といえば、やはり海外現地調査を行うことと、調査に必要な言語を学ぶことである。地域調査実習の授業時間は金曜日の4時限と5時限で、前期(4月～7月)には学生たちは4時限に文献を読み、5時限で必要な言語(2014年度と2015年度は中国語)を柳教員の指導で学ぶ。現地の文化を知るにはまずは言葉から、である。そして、9月に台湾で現地調査を行う。後期に入ると、4時限と5時限をフルに使って、現地調査を踏まえて疑問点や論点を明確にしていく。2015年度の場合、「牡丹社事件」班と「民間信仰」班の2つに分かれて、文献で調べ報告し議論を重ねて、本発表と報告書作成にこぎつけた。

実情をいえば、前期ではなかなか問いを見つけることができなかった。そのため最初に大きな研究枠組みを設定するときは、教員がイニシアティブをとった。後期になると、様子が変わってきた。サポートが必要なことに変わりはないが、それでも問いがはっきりしてきた。現地で強く印象づけられたことや何となく感じたことが生きてきたと思われる。率直に言えば、教員にとっても問いといえるものを見つけるのは容易でない。現地で見たこと、感じとったことを大事にして、いろいろな文献を読み、学生たちと話し合っているうちに、ようやく問いが現れてくる。この点、学生たちとほとんど変わらない。2014年度も2015年度もそうだった。

実際、調査を始めた当初は、1週間にも満たない、1回限りの海外調査で何がわかるのか、何がいえるのか、不安があった。しかし、2年間だが体験してわかったことは、現地で直に触れて初めて問いが出てくることである。やはり、自分の目で見ておけば、文献を読むときも読み方や着眼点が違う。経験的にいって、海外現地調査をする価値はある。とはいえ、このような手応えを得ることができたのには、理由がある。2014年と2015年の両年度とも、呉玲青先生と楊朝傑先生に計画立案から現地調査まで関わっていただいた。調査に必要な情報の提供に始まって、調査する場所と着目点、聞き取り調査の対象者や現地専門家の選択と依頼のほか、バスの手配までお世話になっている。短い調査期間で得難い体験と効果的な調査ができたのは、お二人の周到な準備と同行のおかげなのである。

これまで調査したテーマには台湾の言語問題や牡丹社事件もあるが、学生たちが強い関心を示し、2年間続けて調査したのは、媽祖信仰である。そこで、媽祖信仰と2015年度に追加した民間信仰について、どのようなねらいや期待をもって調査地と廟を選択されたのか、次節で呉玲青先生に説明していただくことにする。

第2節 媽祖信仰調査のねらい

(1)2014年度：台湾の最も著名な媽祖廟の調査

1年目の媽祖信仰調査は、台湾中部にある4つの媽祖廟を中心に行った。このうち3つの廟は朝廷から立派な扁額を下賜された、いわば国家に認められた廟である。最初に調査したのは鹿港鎮の媽祖廟で、新旧2つの廟を訪ねた。鹿港は18世紀末に栄えた米穀を輸出する港の一つで、往時を偲ばせる古い町並みが残っている。旧い方の媽祖廟は庶民が自ら建てた廟である。この廟は商業と経済の繁栄にともない形成された信仰の中心で、「鹿港天后宮」(鹿港鎮中山路)と呼ばれている。鹿港の庶民が日常的にお参りするの、よその宮や廟から進香にきた人たちが参拝するのも、天后宮である。一般的に台湾の庶民が鹿港に行って媽祖に参拝するといえば、旧媽祖廟をいう。

鹿港天后宮とは別に、少し離れたところに、もう一つ、「新祖宮」と呼ばれる新媽祖廟(洛津里)が

ある。「新祖宮」は、林爽文の反乱（1786～1788年）鎮圧後に清朝が勅封で建立したもので、官僚たちが参拝した廟である。同じ街に大きな媽祖廟が2つもあるのは珍しく、ほかには西螺（客家人の廟と閩南人の廟で、出身地が異なる）と大肚（出身地や宗族の違い）にしかない。鹿港の媽祖廟は民間で崇拝される媽祖の普遍性を表現しているだけではない。清朝は、皇帝の軍隊が媽祖のご加護で安全かつ迅速に台湾海峡を渡り反乱を鎮圧できたという名目で廟を建立し、媽祖信仰を利用して、統治の正当性を示そうとしたのである。民衆の愛する媽祖は清軍も助けた、というわけである。清朝が媽祖信仰を認め支持した理由はもう1つある。民間信仰を通して地域社会と深いところでつながって、支配を円滑にしようとしたのである。地域社会にとっても、清朝による「新祖宮」の建立は都合がよかったはずである。というのも、それを逆手にとって鹿港の媽祖廟の知名度を上げることができたからである。ここに媽祖信仰を介した国家と地域社会との関係を読み取ることができる。

鹿港の他に2つの媽祖廟を選んだ。北港朝天宮（雲林県北港鎮）と新港奉天宮（嘉義県新港郷）である。2つの媽祖廟（直線距離にして5kmしか離れていない）はともに川に近いところにある。この事実は、河川交通を利用して人々が往来し、交易が発達していくとともに、媽祖廟がつくられ、地域の信仰の中心になったことを物語っている。2つの廟を選んだのは、鹿港とは異なる点に着目したからである。媽祖信仰にみられる「繞境」活動を通して、民間信仰の本質を構成しているものとは何か、しっかり理解するためである。

台湾中部で媽祖の繞境活動として最も有名なのは、毎年農曆の3月に行われる大甲鎮瀾宮（台中市大甲区）の媽祖出巡である。かつて大甲鎮瀾宮の媽祖は台中県から南下し、彰化県を経て、雲林県の北港朝天宮で進香したものである。ところが、北港朝天宮が鎮瀾宮の媽祖繞境を「媽祖回娘家（媽祖が実家に帰る）」—鎮瀾宮の媽祖が北港の朝天宮の媽祖から分かれ、香火が朝天宮から分け出されたこと（分霊）を意味している—と主張するようになると、大甲鎮瀾宮は北港朝天宮行きを嫌うようになり、嘉義にある新港奉天宮に行き先を変更した。大甲鎮瀾宮から媽祖が出て、地域を巡視することによって、自らの権威の及ぶ範囲を明示し、大甲鎮瀾宮の地域における主導的地位を確立しようとしたのである⁶。

大甲鎮瀾宮の媽祖が北港朝天宮での進香から新港奉天宮での繞境に改め、南巡の終点を変更したことは、北港朝天宮と新港奉天宮との熾烈な競争のように、地方の宮や廟が互いに競い合う関係を生み出した。北港朝天宮と新港奉天宮の廟建築や廟前の商店街などをみると、とてもよく似ている。結局、新港奉天宮が大甲鎮瀾宮の媽祖繞境を北港朝天宮から奪い取ったが、この変更は媽祖の「繞境」がもたらす経済的利益が関わっていることは明らかである。したがって、媽祖をはじめとする民間信仰は、純然たる信仰の観点だけでなく、地域経済との関係からも検討しなければならない。

(2) 2015年度：山間部の媽祖廟とその他民間信仰の廟の調査

2014年度に調査した媽祖廟は台湾の西海岸にある大型廟だったが、2015年度は、高雄周辺の旗津媽祖廟を除いて、主に山間部の媽祖廟を選んだ（朝廷から扁額を下賜されていない）。一般的に媽祖は海の女神であるから、媽祖廟も海から近いところにあると思われがちだが、海岸から遠く離れた山間部にも相当数存在している。調査した旗山天后宮（高雄市旗山区）も山間部の重要な媽祖廟の一つである。旗山一帯は台南から更に南の地域に入る交通の要衝で、山沿いの商業交易で繁栄したとこ

⁶ 矢澤知行「中国・台湾の媽祖巡礼—その成立・展開・現状について—」（『2014年度四国遍路と世界の巡礼 公開講演会・研究会集會プロシーディングズ』、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2015年）を参照。

ろである。漢人が居住地の周辺に開墾を進めるにともない、媽祖信仰も自ずと山間部に広がったのである。

もう一つ訪れた、台湾最南端の屏東県に所在する滿洲郷順天宮も、山間部の媽祖廟である。この廟の特徴は、信徒に漢人（福建人や客家人）とパイワン族原住民（史料では「生番」と呼ばれている）が含まれている点である。祭奉の神は漢人の民間信仰である媽祖で、正面中央に配置されているが、その前には平埔族（漢化した原住民、史料では「熟番」と表記されている）の赤い布を巻いたガラス瓶が置かれている。また、順天宮では、平埔族の老祖祭祀日に瑯嶠 18 社（「社」は原住民の部落のこと）の名前でパイワン族の向婆を招き儀式を行う。このとき、媽祖像の前に 18 社を示す瓶 18 個が置かれ、原住民の食べ物である豚肉・酒・サツマイモ・檳榔などが供えられる。漢人と原住民の混在する地域という事情を反映して、様々な族群の神々が混在している。族群信徒を集めるためであろうが、神々の混在に媽祖信仰の柔軟さと原住民の古くからの信仰の強靱さをみることができる。媽祖信仰が様々な族群の混在する地域環境に適応していく過程で、儀式や信仰内容、さらには神さえもが、苦心の末に創出されたのである。

こうした創出は、媽祖信仰とは関係のない、枋寮にある田中將軍廟（田中綱常）と旗津蔣公感恩堂（蔣中正）でも確認できた。田中將軍廟の宮主は、夢のなかで田中綱常に依頼されて廟を建てたという。田中綱常は日本統治時代初期の文官であるが、主神として中央で祀られている。旗津蔣公感恩堂（高雄市旗津）の場合、神々を 3 体並べていて、真ん中に観音像があり、向かって左側に、出身地である浙江の地方神（天、地、水という「三官大帝」）、右側に蒋介石像を配置している。住民の先祖は中国大陸の浙江の大陳島から来ており、住民たちは蒋介石を副祀の地位において、故郷を離れて移住してきた歴史的記憶を表現しているのである。このような新しい廟も、民間信仰の生成と本質を理解する上で大変重要である。民間信仰の廟は教義に基づいて建てられたのではない。人々がそれぞれの考えにしたがって創り出したものなのである。

(3) 現地調査で学生たちに期待したこと

2014 年度に調査した典型的な媽祖廟と 2015 年度に見た、典型的とはいえない媽祖廟や新たに生成する民間信仰の廟からいえることは、台湾における民間信仰の本質と存在意義を深く理解するには、国家権力との関係、地域性と歴史的記憶、生活環境、媽祖の靈威や経済的利益を巡る地域間競争、現実生活で人々が求めているものとの関係など、様々な関係を視野に入れてトータルに考えなければならぬ、ということである。地域文化学科の学生たちには媽祖信仰や民間信仰の複雑な関係性に気づいてほしかった。そして、それが 2 年間に及ぶ現地調査の最も重要な成果になると期待した。調査対象を媽祖信仰から民間信仰へ拡大したのは、このような民間信仰理解を容易にすると考えたからである。

今回、原住民の居住地も調査対象にした。それは主に牡丹社事件調査のためであるが、原住民の居住する地域には、漢人とは異なる文化的世界がある。それに触れることで、民間信仰をもう 1 つ異なる角度から見ることになると思ったからである。

第 3 節 海外調査という経験

地域文化学科の調査実習の授業で海外に行くのは、東アジアグループが初めてだった。実際、海外調査には言葉の壁、現地での調査対象の選択や協力依頼など、難しさがある。なかなかハードルが高く、ただの見学や旅行に終わってしまいがちである。東アジアグループの場合、幸いなことに台湾高

雄師範大学の呉玲青先生のご協力のおかげで、内容の濃い調査ができた。

本稿執筆にあたって、学生たちにとって海外での調査がどうだったのか、聞いてみた。様々な答えが返ってきたが、最も多かったのは、現地（台湾の人たち）の視点を学べたという回答である。台湾の人たちは自国の政治や社会、自分たちの生活や文化をどのように見ているのか、日本は彼らの目にどのように映っているのか、ということである。調査期間はとても短い。それにもかかわらず、学生たちは、自分たちが台湾をもっぱら日本人目線で見ていることに気づいた。台湾の人々の目線で見ること、見ようとするのが重要だと気づいたのである。そして、台湾に行く前に比べて、台湾を身近な存在に感じるようになった。台湾に関する報道に関心がなかったのが、今ではできるだけチェックするようになった、ということである。このような学生たちの言葉には、驚かされ、感動した。

さらにうれしいことに、2年次の台湾調査実習をきっかけに、中国の厦門大学や韓国の翰林大学校で行われる「言語・歴史・文化プログラム」に参加する学生が多い。鳥取大学地域学部でおこなっている厦門大学・翰林大学校・高雄師範大学の学生たちの「日本語・歴史・文化プログラム」も、サポートしてくれる。どうやら学生たちは台湾調査実習への参加を契機に関心の幅を広め、様々なチャンスを自ら選びとって、積極的に活用しているようである。3年生になると専門ゼミで卒業研究のテーマを決め、4年生で卒論を書くのだが、台湾調査実習や海外プログラムなどに参加した学生たちを見ていると、自然に「問い」が生まれるらしく、テーマ設定に困ることはほとんどない。目の前に何かが開けてくるのだろうか。台湾調査実習がそのような機会となっているのであれば、教員として喜ばしい限りである。

おわりに

今回の現地調査では、牡丹社事件の舞台と媽祖信仰を含む民間信仰の場を訪ねた。日本軍の上陸地点、戦場となった牡丹社、原住民の人たちの記憶と思い。穏やかな暮らしと突然の悲劇。現場に立てば、すべてが胸に迫ってくる。時の隔たりがあるにもかかわらず、自ずと「問い」が現れる。どうしてこんなことになったのか、なぜ痛ましい死を迎えなければならなかったのか。今もお墓にお供えをするとはどういうことなのか。学生も教員も、重い問いを抱えることになった。その一方で、原住民にも漢民族にも、生活のなかに明るさと逞しさを感じた。原住民のしっかりした表情と各地で目にした民間信仰の廟には、やはり圧倒された。「何かある」と直感させるものが、生活のなかに確かにあった。それは何なのか。ここでも自ずと「問い」が現われた。

こうした問いに答えることが、東アジアグループの課題となった。学生たちの「気づき」、教員の「気づき」も、出発点はここにある。学生も教員も懸命に調べ、つかみとり、伝えようとした。目に見えるような成果、言葉で的確に表現できるような成果は多くない。それでも何か重要なものをえたと、思っている。

(2017年1月27日受付, 2017年2月1日受理)